

令和4年度 第2回神戸市就学・教育支援委員会

議事要旨

- 1 開催日時 令和4年9月29日(木) 15時~17時
- 2 開催場所 神戸市総合教育センター601号室
- 3 出席委員 石倉委員長、関口委員、河崎委員、中西委員、小林委員、上原委員、二宮委員、西田委員

オブザーバー 内藤氏(医療センター中央市民病院総合聴覚センター長)

岡氏(兵庫県立聴覚障害者情報センター)

榎本副課長(兵庫県教育委員会)、山田校長、辻園長

4 議事

(1) 聴覚障害教育についての検討

(事務局より資料1について説明、その後、内藤氏及び岡氏より情報提供)

●委員

- ・課題が3点あると思う。
- ・1点目は、最初の状況調査で通常学級にも難聴児が多いということが分かっていただけだと思うが、通常学級に行っても困っている児童がおり、きこえとことばの教室に行っていない、その子供たちをどう拾って対応していいのか。
- ・2点目は、聴覚支援学校や難聴学級に通う子供が少なくなっている。難聴児同士で学び合える、成長し合える部分が大きいと思っており、現在、難聴学級が小中1校ずつだが、その数を増やして通いやすくすることで、通う子供が増えるのかどうか、少ない状況をどうしていいのか。
- ・3点目は、難聴学級自体が、言語理解との相関関係なども含めて、どういう児童に対する学級としてふさわしいのか。

○事務局

- ・これまでは、難聴の子供たちは、難聴学級ときこえとことばの教室で、学べているだろうと捉えていた。しかし、本当に難聴の子供たちがどのように聞こえていて、今後どのように個の力を伸ばしていくのか、しっかり分析しなければならないと考えている。
- ・本日欠席の委員からもご意見をいただいているが、ただ単に第2の祇園小、湊翔楠中を作っていけば、通いやすいところに通えるのではないかというのではなく、難聴児同士が学び合える場を作っていくのかを含めて検討していく必要がある。
- ・支援学校なのか支援学級なのか、通常の学級なのか、事務局が基準やライン、環境を考えた上で整理していくことがとても重要であると感じた。

●委員

- ・特別支援学校や難聴学級は保護者が希望されないことも多いようだ。子供が言語を獲得して話はじめると、親は子供が通常学級でやっていけるといふ思いをもち、支援学校などの

特別な場所を希望しない。また、県の聴覚支援学校や難聴学級でも小学校では保護者が毎朝子どもに付き添う必要があり、家庭の負担になっている。

- ・実際に難聴学級の教員も、昔は精通した教員がいたが、今は職員の転勤があつて、初めて担当する教員だと、親子とも専門性に不安を持つことがある。また、各県市によって難聴学級の運営や仕組みが異なっていて、よそではこういうことをしてくれるのにといい、保護者の希望と合わないこともある。
- ・きこえとことばの教室に関して、発達障害に関係した相談が多いことや、教員も学校で担任した時の経験から発達障害の子供たちに対する指導に関心がいつていると思う。難聴の講音指導は地道に時間をかけて行う必要があるが、新しい教員にはすぐできないし、指導内容や専門性に課題があると思つている。
- ・保護者の意識も子供が聞こえて声を出せばしゃべつていく感覚になるが、言葉の質や対人関係も重要。難聴学級ではグループ指導も取り入れられて、そこでは仲間意識があつて子供たちも話すが、通常学級に行った時にどこまで配慮ができていくのか。子供自身の中では持っている力をだせないなど、目が届かなくて寄り添えないことがある。保護者の理解をどう進めていくかも課題である。

●委員

- ・かつて難聴の学生がおり、合理的配慮の申請があつた際に、当該学生から障害の状況や希望する配慮についての内容を聞いて環境を整えた。その学生は実習環境を整えたことにより、自分の能力を発揮することができ、実習目標を達成し、卒業後看護師として勤務している。よく聞かないとどういう配慮が必要なのか分かりにくいというのが自分の体験としてある。
- ・孤立しないよう、同じ疾患状況を持っている人たちの輪に入っていくことが大事だと思つている。

●委員

- ・配慮を自分から言い出すのはすごく難しいことだと思つる。話すことのできる子は、おとなしい子として見過ごされてしまうところがあつて、なんとなくついてきているので、発達障害など、対応が必要な子に目が向いてしまう印象がある。
- ・先ほど「支援をしてもらつていることへの感謝を感じられる子供に」という話があつたが、まずは、当たり前のように親や教員が支援できる環境がある方がよいと思つる。力のある難聴の子供たちはなんとかこなしていく。通常学級で頑張つている子供、言わない子供たちへの配慮を、こちら側からどれだけできるか、もっと支援や支援ができる人が増えたらよいと思つる。

●委員

- ・発達障害全般に関わつているが、視覚や聴覚だけは全く取り組めておらず、重複の子もいるが、適切なアドバイスができていない状況である。
- ・今日の話をついて、難聴児の治療や変化がすごく進んでおり、0歳で診断して治療にもつ

ていくことがいかに大切か、重要性をもっと小児科医が認識すべきと思った。

- ・治療方法が進んでおり、対応も変えていかなくてはならない。人工内耳の入った子供たちがでてきて、今までと違う問題点が出てきていることに対し、教育現場での対応をどう変えていくかが重要である。
- ・医療的ケア児でもそうだが、最近インクルーシブ教育が進んでいるが、それだけが本当に子供たちにとって良いことなのかということは、関わる教育・福祉・医療の現場がしっかり考えてサポートしていかなければならない。
- ・もちろん地域校で過ごせるメリットも多いと思うが、そこで学べないものをどうサポートしていくか、同じ障害の子が集う機会、親が集まる機会を増やしていくことが大切ではないか。

●委員

- ・進学・進級に伴い、親から学校や周囲の人たちへの説明がまた必要になる。以前の学校ではやってくれたことが今はしてもらえないといった話は視覚障害でも同様である。視覚障害は人数が減ってきている分、情報のやり取りがしやすくなっているはずである。
- ・少ないストレスで必要な情報を得られる提示の仕方が大事と感じた。
- ・患者の会とか、通常学級に通っていても同じ障害同士での情報交換があると精神理念も含めてサポートが得られると思う。

●委員

- ・難聴の子供は聞こえだけでなく言語発達の問題があることをあらためて認識した。
- ・生後6か月からの介入が必要とのことだが、事例で人工内耳の手術が少し遅い子もいたが、もう少し早い方がよかったのではと単純に思ったがどうか。

●オブザーバー

- ・今回示したデータは高校を卒業してから大学までの全てを確認できる20年前の子どものデータも含まれている。当時は2歳以前に手術をしてよいのかということがあり、人工内耳の手術も安全性と効果が明確に分かるようになって順次低年齢化してきた。
- ・もうひとつは一定の聴力があり、補聴器のカテゴリに入っているが、じわじわ悪くなり手術年齢が高くなるケースや、親の方針で手術を受けさせない、親が決断できなくて遅くなるケースがあって、一律に1歳前後にならないところがある。
- ・昔の手術の子供たちを入れるとこうなるが、1か月までに発見し、3か月までに確定診断し、6か月から介入する。現在は、1歳までにだいたい見通しを付け手術している。

●委員長

- ・本日欠席の委員よりコメントを預かっているとのことなので、事務局よりお願いしたい。

○事務局

- ・「地域の学校において、適切な指導者の確保、機器の整備が十分でないということなら、聴覚障害に知識を持った指導者を積極的に養成し、各校の設備整備を進めるということが、本筋のような気がいたします。仮に、難聴学級を設けるとすると、その学級は、どの

ような新たなサービスを提供できるのか、対象とする子ども、そのサービスが最も必要な子どもはどのような子どもか、将来、地域の学校での体制整備ができたなら、どのように地域の学校と連携するのか、などを予め考えておく必要があると思います。

同時に、現在の難聴通級教室では何が足りないのかを分析する必要があると思います。地域で学ぶ子どもを支援するという難聴通級教室の姿勢は非常に素晴らしいと思うのですが、どのような部分が不足しているのでしょうか？ また、地域の学校との関係で、難聴学級は、難聴通級教室とどのような関係を築くのでしょうか？難聴の子ども同士の触れ合いも大切ですが、定型発達の子もたちと一緒に学び、定型発達の子もたちにも難聴児の持つ不便さを十分に理解してほしいというのが、難聴児ご家族の願いのように思います。

また、一般小中学校の担当先生方の理解を深めるためには、オンライン等により教職員が学びやすい環境設定と個別の相談に乗れる体制づくりが必要だと思います。そのためには、県立聴覚支援学校とのより一層の連携が必要と考えます。」

- ・オンラインを通じて神戸市の子供たちも県立聴覚支援学校に大変お世話になっている。そのあたりの情報を県よりご紹介願いたい。

●オブザーバー

- ・昨年度、兵庫県教育委員会で開催した「難聴児支援のあり方検討会」でも今日出ていたようなことが話題になった。
- ・今の保護者は地域の学校にというニーズが高いが、就学先決定の仕組みについては、平成25年に保護者の希望が最大限に尊重させる仕組みに変わった。保護者は希望を言いやすくなったが、その際に保護者が選択するための十分な情報を得られているかが重要な視点であり、県としても、どのように情報提供していくか、あらためて考えないといけないと思っているところである。
- ・県には難聴児を支援する療育施設がないので基本的には聴覚支援学校の保育相談部で対応している。保護者にとっては、聴覚支援学校に相談に行ったらそのまま入学しなければならないと思われるようで、また、敷居が高いといった意見をいただき、名称を「総合支援センター」に変更した。
- ・実際0歳から教育相談をして、就学の段階になって、聴覚の幼稚部から地域の小学校に入学する子供もたくさんいる。通常学級に入ったあとも教育相談や、通級による指導でフォローしていくが、昨年からは遠隔による指導を、WEB 会議システムを用いて試み始めた。
- ・ICT 機器も進化しており子供の人工内耳や補聴器に直接音声が届いて聞き取りやすいとの効果があった。一方、教員も、機器の技術進歩に追いつかないことがあり、まだまだ研究中である。
- ・教員と生徒の間だけで機器を使うのではなく、他の学校に在籍している難聴児との交流に活用してみた。夏休みに難聴児が集まって活動する機会を設けているが、特に中学になると部活や塾で忙しく、夏の活動に参加しにくいことから普段通級指導を行っている時間

に実施している。

- ・他の学級の生徒とオンラインでつながり、自分の紹介や自分の考えていることを発表、説明しあっている。その経験を通じて、どのような支援があると自分にとって分かりやすいかを体感させ、次からは自分で必要な支援を求められるようになる、そういった効果を期待して取り組んでいる。始めたばかりだが、より活用できるように、取り組みを進めたい。
- ・その他にも、オンラインで字幕が付けられる機能を試してみて、それを見ていた他の中学の先生がこんなこともできるのかと学級活動に取り入れるなど、活用が広がっている状況がある。

●オブザーバー

- ・まずもって、聴覚に関心を持っていただけることがうれしい。まず神戸市からひとつのモデルとして進めていただき県下 41 市町に広がっていくとよいと思う。

●オブザーバー

- ・難聴の子どもたちのよりどころになる、船で例えると、母港のような、ほっとできる、気楽にできるような場所を提供したいと思って神戸難聴患者サロンをやっている。対面でも、またオンラインで遠くの方も参加していただいている。今日の話も参考にして、難聴の子どもたちがもっと気楽に生きていけるような工夫をしていきたい。

●委員

- ・聴覚に特化して勉強したいという学生はそれほど多くないが、発達障害を中心として特別支援教育に興味を持って勉強する若い学生、現場の先生は確実に増えている。その学生たちが、勉強していく中で、今回の聴覚や視覚など低頻度発生障害についても少しずつ勉強しており、期待をしているところである。若い人は、ICT の活用もそうだが、スキルも高い。そして、その集団のパイは大きくなってきている。
- ・通常の学級の中で、配慮ができるような目をもった教員が増えれば、また育てていけないといけないと思った。

○事務局

- ・目には見えないが、クラスの中で聞こえたふりをして過ごしている、出来ないからしないという子どもたちがいるなら、この子たちの力を最大限に伸ばしていくことが、我々の役割であると思う。まずできることは、難聴学級や、今通常の学級で難聴の子どもがいる先生方に今日の内容を伝えていくことだと思っている。
- ・この子供たちが力を発揮できるような分析をさせていただいて、学びの場を考えてく。時間はかかると思うが、しっかり進めていきたい。